ジブチにおける民族紛争
―歴史と現在（1）

岡　倉　登　志

Rivalités Ethniques dans la République de Djibouti

Takashi Okakura

はじめに－問題の設定

筆者は19～20世紀の大英帝国およびフランスとともに同期のヨーロッパ＝アフリカ関係を専門としているが、併せてアフリカ政治史、アフリカ政治も研究領域としている。なかでもアフリカにおける民族紛争の十字路ともいえる、「アフリカの角」地域に関心を抱いている[1]。

ところで、「アフリカの角」とはどこを指しているのであろうか。アフリカ大陸の東北部でサイの角の形をした地域のことで、信頼のおける『アフリカを知る事典』（平凡社）や『世界史小辞典』（山川出版社）によれば、エチオピア、エリトリア、ソマリア、ジブチの四ヵ国を含む地域を指している。しかしながら、筆者はこの四ヵ国にスーダンを加えるべきだと以前から考えており、その理由はすでに編著『ハンドブック・現代アフリカ』（明石書店）や近刊の『国際政治学事典』（弘文堂）でも述べたように、スーダンは、経済的にも政治的にも、あるいはイスラームという宗教的・文化的な面からも、他の「アフリカの角」諸国との少なからぬ繋がりをもっているからである。

もっとも、「アフリカの角」という呼称は中東とか、中近東というのと同様に最初はヨーロッパ人が用いたものであり、極論すれば、この地域に暮らす人々にとってはどうでもいいことかも知れない。

ちなみに、「アフリカの角」を総体的に扱っている欧米の研究書（あまり多くない）ではどのように範囲、言い換えればこの地域に属している国を定めているのかを簡単に紹介しておこう[2]。ジョン・マルカキスは、コロンビア大学で学位を取得後、アフリカの大学やスコットランドの大学で教鞭をとったアフリカ研究者で、さまざまな書評で絶賛された彼の著書には南部スーダンが含まれている。すなわち、結論を含む10章のうちの１章を南部スーダン問題に充てている。それに対してジブチの記述は断片的で、300頁の本で10頁程度に過ぎない。次にロンドン大学にある世界有数のアフリカ研究の場であるSOASのガードン教授の編著は８つの論文のうち３本がイギリスとの歴史的関係も深いスーダンに充てている。また、ジブチに関する独立論文はないが、120頁足らずの本で17頁にジブチが出てくる。

以上に対してフランス語で刊行され、二人のアミアン大学の教員も執筆しているが、コリン・リーガムやロンドン経済大学のフレッド・ハリデイも執筆している本[3]は、エチオピアとソ連の関係を中心とする1970年代の「アフリカの角」をめぐる国際関係を主題とするものであるが、スーダンは登場しない。この時期のエリトリア解放運動あるいはエチオピアからの分離独立運動にあってスーダンは、エリトリア解放戦線 E. L. F. を支援していたはずであるが、ソ連外交に焦点をあてているためか、ここではエリトア人民解放戦線 E. P. L. F.（フランス語では F. P. L. E）のみしか述べられていない。

以上の著作でもそうだが、面積２万2200平方キロで四国の1.3倍の国シブチ共和国はほとんど注目されていない。しかしながら、同共和国のシブチの港町が首都に選ばれ、内陸の大国エチオピアやスーダンにとっても海への出口を提供するジブチ=アジス・アベバ鉄道を開通させたことにより、その経済的な役割、そして時には軍事的にも侮りがたい役割を演じたのである。そしてこの地をめぐってのヨーロッパ諸国や、エチオピア帝国やスーダンのオスマン勢力やスーフィの原理主義的なイスラームの一派マフディー派の動向などが、歴史的には検証されるべきであろう。少なくとも、現代アフリカ政治の観点からすると、1960年代後半からのジブチをめぐるソマリアとエチオピアとの対立関係は、言及されるべき研究対象であろう。

筆者自身も、ジブチの民族紛争について系統的に検討したことがなかった。筆者の今までのジブチへの関心は、エチオピアとの関係からであり、とりわけ1930年には日本も塩の輸入や綿繊維の輸出などで利用したジブチ＝アジス・アベバ鉄道との関係においてであった。[4]ただし、1996年にエチオピアにおける研究・調査に向かう往路をあえてジブチ経由をとり、数日間だけ滞在した首都ジブチで少数のアファル人がホテルの下働きならよい方で劣悪な状態にあるという話を聞いたり、一部目撃したことや、サッカースタディアムにフランス語で大きく書かれた「政治犯を釈放せよ」という落書は、書物で読んでいたジブチの民族紛争、すなわちアファル－イッサ問題の実在を実感させたのである。

その後、関連記事や関連著書を多少は集めたが、まとまった形では示す機会をもたなかった。今回筆をとることにしたのは、2003年より筑波大学の佐藤俊教授を代表者とする「東アフリカ遊牧圏における生活安全網と地域連環の総合的研究」をテーマとする文部科学省科研費により2005年２月から３月に現地視察（調査のレベルには至らない）をするのに先だって、覚書きにせよしたためておきたいと考えたからである。限られた時間でまとめるので不十分かつ未消化かもしれないが、未知な分野の空白を埋める役割は果たせるものと確信している。

註

（1）エチオピアについては２冊の著書『二つの黒人帝国』東大出版会、1987、『エチオピアの歴史』明石書店、1999などが、ソマリアについては編著『アフリカ史を学ぶ人のために』所収論文、世界思想社、第二版、1991が、エリトリアに関しては田中浩・和田守編『民族と国家の国際比較研究』未来社、1997が、スーダンに関してはマフディー国家に関する論文が数点ある。全般にわたるものとしては、

編著『ハンドブック・現代アフリカ』明石書店、2003と『アフリカの歴史』明石書店、2001参照。
（2）John Markakis, *National and Class Conflict in the Horn of Africa*, Zed Pfess, London, 1990（オリジナル版は1987年にケンブリッジ大学出版局より発行。Charles Gurdon（ed.）, *The Horn of Africa*, UCL. Press, London, 1994.
（3）Colin Legum, Fred Haliday, *La Corne de l' Afrique*, L' Harmattan, Paris, 1986.
（4）生田滋・岡倉登志編『ヨーロッパ世界の拡張』世界思想社、2001、135~146、158~167頁。

1．ジブチ共和国における民族構成

ソマリ系イッサ人とアファル人

ジブチの人口は2000年の国連推計では46万人であるが、エチオピアやソマリアの難民をはじめ、対岸のイエーメンが政情不安なときには北からも難民が入り込んだ。したがって人口は流動的であるが、2003年の外務省のデータは約65万6500人としている。この総人口を正確に把握できないと民族構成の実体を把握できないが、この小論のテーマにアプローチするには、予めジブチにおける民族構成について調べる必要がある。そこでまず手始めに外務省の2003年のホームページを引いておく。それには次のような説明がある。「ジブチはソマリ系イッサ族[1]50パーセント、エチオピア系アファル族37パーセントで、イスラーム教徒が94パーセントである」。これにしたがえば、約33万のイッサ人と約24万のアファル人が居住し、その他が13パーセントということになる。『アフリカを知る事典』の［住民、社会］では、「北部のクシ系のアファル族と南部のソマリ系のイッサ族が住民構成を二分しているが、アラブ、ヨーロッパ人も居住している。本来遊牧民のアファル族はエチオピア北東部に、またイッサ族ソマリアに、それぞれまたがって居住している。首都ジブチの住民の大多数はイッサ族からなっている」と書かれている。

アファル人にエチオピア系の代わりにクシ系が冠されているが、言語的にはソマリ語も、アファル語もクシ語族に属している。また、上ナイルにエジプト文明のようなクシ文明を築き、４世紀にエチオピアのアムハラ王朝に滅ぼされたのはクシ王国であるが、これと特にアファル人が結びついているとも思えない。クシ系と呼ぶ根拠はもう一つ不鮮明であるが、エチオピア系という呼び方は領土問題が絡んだり、1977年６月27日にジブチが独立したときの統一の願いに反することになりかねないかも知れない。

旧フランス領ソマリ海岸（1967年には投票によりアファル・イッサと名称変更）をも含めたソマリア史を研究しているルイスの説明[2]は、もう少し詳しいし、正確である。「エチオピア低地とエリトリアのハム語系の、（しばしばクシ語系‘Cushitic’と呼ばれている）極めて緊密な同族は、伝統的に好戦的なアファル（またはダナキル）、オロモ（ガラ）、サホ、それにベジャである。遊牧民のアファルはジブチでも活動している」。そして註の部分にはこう記されている。「アファルというのは外部で知られているアラビア語の名前である。ソマリ語では一般にアウダリとして知られている。ジブチにはおよそ15万人いる」。最後の数字が最終改訂版前年の2001年のものかは不明である。

ここに出てきたダナキルについては後述される。

独立の願いとジブチの民族構成の特徴は、実は国旗のデザインに示されている。ジブチ国旗は上下をイッサを表わす青とアファルを表わす緑に分け、三角の白は二つの主要民族の統一と団結を表わしている。さらに赤い星は国家の独立を象徴しているのである。

少数民族

アファルとイッサが二大民族で、外務省データによればその他が13パーセント居住しているのだが、数万の難民を除くとどのような民族がどれくらい居住しているのであろうか。

これにもいくつかの説明があるが、ここでは信頼のおける二つの説明を紹介したい。最初の『ジブチ歴史事典』にはこうある[3]。「首都ジブチの人口はよりコスモポリタンである。エチオピア人、インド人と同様にイエーメン人の共同体がある。ヨーロッパ人の共同体は人口１万で、その多くはフランスの軍人と民間“協力者”である。イタリア人とギリシャ人はずっと少数である」。

しばしばアラビア人と表記されているのはジブチではイエーメン人のことなのである。フランス軍人とは、わずか数日の滞在であったが、私が宿泊したホテルで目にしたフランス海兵隊員のことである。その数は1990年代に内紛が激しくなると増員された。また、絨毯をホテルで売るパキスタン人がいた。首都のごく少数派住民の詳細は、エチオピア、エリトリア、ジブチに500頁以上を割いているガイド・ブックに記されている。「マイノリティーとしてアラブ人－主にイエーメン人で、その人数は１万4000人である。彼らは貿易商、商人として働いている。ヨーロッパ人は基地のフランス兵3000人を含めて約8000人である。他の国籍を持つのはギリシャ人、イタリア人、アルメニア人、インド人、パキスタン人、中国人、ヴェトナム人である」。[4]

この記述にはギリシャ人やイタリア人をヨーロッパ人に含んでいないという一目瞭然の誤りもあるので、イエーメン人に関して別のデーターにあたってみた。ジブチ出身の政治学者で後に詳述されるアファル人の政党 FRUD『統一と民主主義の復興戦線』党員のアリ・クーバは、1995年に「もっぱら首都に住んでいるイェーメン人は、総人口の５～６パーセント」としている。[5]

ちなみに1985年の在留邦人はゼロであるが、海外協力隊とか、自動車や繊維関係の貿易に従事する邦人はいるが、たとえ２～３年滞在したとしても人口統計には現れないであろう。

二つのイッサ人？

イッサを二つに分ける考えもある。パソコンでジブチの項の、世界の国々の部分を検索するとその考えが現れる。すなわち、佐藤よしゆき氏作成によるジブチの民族構成では、イッサ人はソマリ系イッサ族33パーセント、ソマリ系ガダブージ15パーセントとなっている。そこでルイスの著作[6]を調べてみると、イッサもガダブルシ Gadabursi も、もともとは Dir という同一クラン＝氏族（血縁的民族集団で、ソマリアによく残っている）に属していた。彼らの区別がはっきりしはじめるのは、19世紀末のアフリカ分割が進行する過程である。すなわち、イッサがフランスの

保護領を活動領域にしたのに対してガダブルシは主としてオガデンで生活していた。1898年ころよりオガデンにはエチオピアとイギリスの勢力が及んでいた。言い換えれば、ソマリアの分割過程でイッサとガダブルシは別の地域に住み、それまで日常的に見られた両者の婚姻関係も激減したのではなかろうか。

もし、ジブチの独立前後に遊牧民特有の国境が国境でなくなっていれば、再び両者の交流も復活したといえようが、バレ独裁政権打倒の内戦が終幕にさしかかった頃のソマリアを取材したジャーナリストの著書[7]にある地図は、ジブチにイッサが、エチオピア（オガデン＝「西ソマリア」）にガダブルシが住んでいることを物語っている。

クーバは次のように述べている。[8]

「ガダブルシも、イッサも、ジブチの南に位置した旧英領ソマリランドからの移民であり、彼らの移動は19世紀末より1960年頃まで続いた」。

話は変わるが、旧ディル・クランの仲間で、家畜の商取引でも協力関係にあったソマリア民主共和国の一員であった北部のイッサク人[9]が分離独立したときには、イッサもガダブルシも、ともにその独立運動を支援した。要するに、1991年５月に「ソマリ国民運動」SNMが北部の独立を宣言したときに、イッサ、ガダブルシを含む北部のクランの長老全員が賛同した。ちなみにソマリア国内には、イッサの政党「統一ソマリア戦線」USFとガダブルシの政党「ソマリ民主同盟」SDAが存在している[10]。

民族分断化

イッサと同じくアファルの分断は、イギリスとフランスさらにはイタリアにエチオピアを加えた「アフリカの角」の争奪戦において固定化されたことによって決定づけられたのではなかろうか。[11]たとえば、その結果としてエチオピア領内に住むアファルの中には農業を生業としてそこに定住し、アムハラやオロモ（別名ガラ）と婚姻関係を持つ者も出てきた。けれども、今後の検討課題であるが、アファルは、すでに植民地化以前に大きな二つ以上のグループに分かれていたと考えられる。

その推論の手がかりとしては、象徴派を代表する詩人アルチュール・ランボーのエチオピアやジブチ周辺における武器商人としての活動記録があるように思うが、[12] エチオピアにおけるランボーの足跡を長年辿ったアラン・ボレルやフランスにおける文学専門誌のランボー没後百周年記年号にも執筆されている川那部保明も編者に加わっている1300頁余の大著である『ランボー作品と生涯』の本文のみならず付録の年表や人名（用語）事典を中心とするtable「目録」が参考になろう。[13] とりわけ、「目録」のアッサ・イマラの項目にまとまった記述がみられる。

アファルは二つのグループに分けられる。アドヒャマラ（白い人々）とアッサヒャマラ（赤い人々）にである。前者は紅海沿岸部と白砂地域に住み、後者は内陸部の赤い土地に住んでいるから、このネイミングはおそらく的を得たものである。アウッサ・スルタン国のアファルはアッサ

ヒャマラで、1885年にスルタンとなったモハメド・アムハリ（フランス語ではアンファレ）によって知られている。アドヒャマラのスルタン国はタジューラ、ゴバアド、エイタである。ダンカリも見よ。

ダンカリの項目にあるアファルの記述の多くはほぼ繰り返しであり、アドヒャマラとアッサヒャマラの４つのスルタン国のことが記されている。ただ新しい記述としては、アラブ人はアファルのことをダナキルまたはダンカリと呼んでいたことと、1880年代にジブチ、エチオピア方面を訪れたヨーロッパ人がこの部族に殺されたために、ヨーロッパでは彼らを野蛮視していたということがある。

以上からは、少なくとも1885年以前には明確にアファルが二つに分かれていたことが判明する。もう少し調べてみると、アウッサのスルタン国は、1570年代にはエチオピアに住むソマリ人、ガラ人、さらにはダンカリに攻撃されていた。彼らの住む地域は砂漠地域であったが、決してそれが自然の要塞として役に立たなかったので、周辺に強力な「国家」が現れれば貢ぎ物外交も行なった。ちょうどポルトガルのジェズイット教団メンバーがアウッサに到着した1624年には、少なくとも間接的にはオスマントルコに保護を求めていた。[14]ここで重要なことは1570年代のアウッサはダンカリに攻撃されていたからアファルではなかったであろうという点である。

ダナキル＝ダンカリ[15]はアラブ人またはアラビア語の呼称[16]であったが、19世紀後半に彼らと接したヨーロッパ人はもっぱらこれを用いてきた。もちろん前述したランボーもそうだった。エリトリアでは現在でもダンカリ＝ダナクラが使用されている。また、それはあまり良いイメージを与えていないようであるが、一例だけあげておく。[17]「そこは地球上で最も暑く、最も人々が不親切な地である。そこは紅海のマッサワから北部エチオピアと北西部ジブチに延びる火山性の砂漠〔奥軽井沢の鬼押出のような溶岩がごろごろしている場所で、ジブチ空港からエチオピアに向かう飛行機はこの上を飛ぶ〕をダンカリアと呼ぶ。そこは伝説上のアファル人の居住地である」。

註

（１）一般的には Issa だが、ソマリア史の大家イオーン・ルイスは、Isa（Dir）としている。（I. M. Lewis, *The Modern History of Somalia*, Ohio University Press, Athens, 2002.（4th edition）また、以下では日本語引用文では族を用いるが、それ以外では人を用いる。族が少なくともアフリカに関しては蔑称的印象を与える部族の族を連想させるからである。

（２）*Ibid.*, p. 4, p. 311.

（３）Daoud A. Alwan & Yohanis Mibrathu, *Historical Dictionary of Djibouti*, The Scarecrow Press, London, 2000, p. xxv.

（４）F. Linzee Gordon, *Ethiopia, Eritorea & Djibouti*, Lonely Planet Publications, Melbourne., 2000, P. 429.

（５）Ali, Couba, *Le Mal Djiboutien*, L' Harmattan, Paris, 1995［Couba（１）］, p. 26.

（６）I. M, Lewis, *op, cit.*, p. 23, p. 43, p. 54, p. 56, p. 106.

（７）Stephen Smith, *Somalie : La guerre perdue de l' humanitaire*, Calmann-Levy, Paris, 1993,

（８）［Couba（１）］, p. 25.

（９）イサック氏族の創設者シェイフ・イッサクは、東で接するダロドからの防衛のために地方のディル・ソマリと姻戚関係を持ったとされている。（I. M. Lewis, *op. cit.*, p. 22.）

(10) Gurdon, *op. cit.*, P. 48.
(11) ルイスはマフディー期の最後〔1898年〕から第二次世界大戦までがソマリア西部の動乱期であり、とりわけイッサとガダブルシの場合がそうだったとし、この時期に彼らが英仏エチオピアによって分断されたことを指摘している。(I. M. Lewis, *op. cit.*, p. 106.)
(12) 日本語で読めるものではアラン・ボレル著、川那部保明訳『アビシニアのランボー』東京創元社、1988、鈴村和成『ランボー砂漠を行く』岩波書店、2000がある。
(13) Edition du Centenaire, *Arthure Rimbaud œvre-Vie*, arléa, Paris, 1991, p. 609, p. 620, p. 655, p. 666, p. 944, pp. 948~9, p. 952 etc..
(14) アウッサについてのまとまった記述がないので、M. Abir, *Ethiopia and the Red Sea*, Frank Cass, London, 1980, pp. 139~140, p. 219のみを参照。
(15) 註 (13) のp. 948によれば、ダンカリはダナキルの単数系である。もっとも著名なランボー研究者ジャン・マリー・キャレエ（邦訳『ランボオの手紙』の原文の編者）が1931年に書いている註は逆のことを書いている。(*Lettres de la vie littéraire d' Arthur Rimbaud*, Gaallimard, Paris, 1990, p. 106.)
(16) クーバによれば、以前に存在したアファルの首長国アンカラの変形がダナキルである。(Ali Couba, Djibouti, *Une Nation en Otage*, L' Harmattan, Paris, 1993, p. 9〔Couba（2）〕.
(17) F. L. Gordon, *op, cit.*, p. 407.

2. 植民地時代のジブチ

ジブチの住民（民族）構成の説明に多くのスペースを割いた。もちろん、それでも不十分なのだが、紙幅の制限上やむを得ない。そこで本節のテーマである植民地時代のジブチは、いずれ詳細に取り上げることにして、いくつかの重要な出来事と基本的事柄だけを簡潔に述べるに留めたい。

スエズ運河の開通とジブチの開発[1]

周知のことだが、スエズ運河が開通するのは1869年のことである。それは紅海からインド洋にかけての東アフリカやアラビア半島のイエーメンの港町を中心とする建設を推し進めることになるが、その出発点は、フランスのレセップスとエジプトの太守イスマイールが主導権を握って設立された「万国スエズ海洋運河会社」が活動をスタートさせた1859年にまでさかのぼれる。この年の前年に、この運河の紅海側の出口であるスエズの南に位置したゼイラ（現在のジブチ共和国の首都ジブチの南東40キロメートルに位置）のスルタンだったアブバケル・イブラヒムは、イエーメンのアデンを拠点としていたフランス領事にタジューラ湾の一部を譲ってもよいと申し出ていた。

このスルタンは、富裕な武力も強い商人であったが、1859年にフランスのアデン領事が暗殺されたこともあり、エジプトとその背後にいたイギリスに接近した。その結果、ゼイラはイギリスの勢力下に入り、フランスはオボク、次いでジブチを開発する。1880年代を武器商人として「アフリカの角」で活動していたランボーは、オボクやアファル人、エチオピアの情報を提供してくれているが、1887年８月の手紙ではゼイラがイギリス支配地であることとともに、タジューラから60キロほどに塩の沼（ランボーは塩湖と表記）があり、フランスの会社が開発に着手している

との情報がみられる。この点についてはすぐ後に取り上げる。

オボクは1862年３月のアファル（ダナキル）の長たちと交わした条約により、タジューラ湾の北側のラス・ドゥーメイラから南側のラス・アリまでがフランスの土地であることに決まった。1881年に「フランス＝オボク通商会社が設立されてからオボクは注目され、1884年６月24日には、レオンス・ラガルドゥという人物がオボク保護領の総督に就任している。しかしながら、フランスのみならず、ヨーロッパ諸国にとり、市場としても、農業開発にとっても将来的に有望と判断した内陸のエチオピア帝国内における支配権を確立するために、海への出口としてエリトリア、ソマリア沿岸部とともにジブチ沿岸部を再検討しはじめた。その結果として、オボクよりも将来性のある国際港としての候補地にあがったのが現在の首都ジブチであった。

ラガルドゥの着任から一年も経たない翌年の３月26日には、今度はイッサの長たちと条約を締結し、アムバド湾とラス・ジブチ湾[2]との間の土地を獲得した。イギリスは、フランスのジブチ方面への勢力拡張に反撃するために、ソマリア保護領をベルベラよりフランスの領土に向けて拡張しようとした。そうした妨害にもかかわらず、フランスは、翌1887年にはジブチの町の基礎を、さらにその翌年にはジブチ港を早くも着工させた。

しかしながら、ジブチがその重要性を増し、新たな発展を遂げるための重要な契機は、「アフリカの角」をめぐるヨーロッパ列強の帝国主義的争奪戦において一歩も二歩も他の列強－英仏露さらに独をリードしていたイタリアが1896年にエチオピア北部のアドワで敗北を喫した[3]ことによりフランスがエチオピアで一時的にせよ優位に立ったこと[4]と関連している。

ジブチ=アジス・アベバ鉄道の開通[5]とジブチ

植民地鉄道建設には、大きく三つの目的がある。一つは資本投資、一つは産業奨励、残りは軍事的目的である。ジブチ=アジス・アベバ鉄道も例外ではない。最初の目的としては当初（1894年以降）フランス政府がエチオピア皇帝メネリク２世にも株を購入させたエチオピア帝国鉄道会社」、1908年に経営が「ジブチ=アジス・アベバ鉄道会社」に取って代わられてからは、インドシナ銀行が関与した。フランスでも高く評価されているインドシナ銀行の研究成果には、次のように記されていた。

「〔インドシナ銀行は〕エチオピアでは1908年にジブチ=アジス・アベバ鉄道会社の創設に参加している。ジブチ=アジス・アベバ鉄道の建設は、雲南鉄道と並んで、インドシナ銀行が取り組んだ産業事業の中でもきわだって大規模な事業であった」。[6]

第二の産業奨励は、南西部のカファにおけるコーヒー栽培や綿か栽培がすぐに思いつくが、ジブチのアファル人の関係していた岩塩の採取を軽んじてはいけない。アファル人はもともと「正規の」遊牧活動以外に塩の取引きにより利益を得ていたであろうし、1995年の時点でも、約１週間をかけての過酷な塩の隊商がアファル人にとって重要な現金収入源であったことは、TBSテレビで放映されたドキュメンタリー『神の詩』ならびに「世界ウルルン紀行」という番組によっ

て映像で示されている。ドキュメンタリーは、機械化の波が塩湖からの塩採取にも押し寄せていると最後を締め括っているが、1880年代に塩採取のフランスの会社が設立されたことは、アファル人の社会生活にとって、それから一世紀以上が経過した20世紀末の変化と類似のものであったのではなかろうか。

しかしながら、少なくとも奴隷貿易がまだ続けられていた第一次世界大戦以前には、奴隷貿易ルートと重なるアッサル湖の塩の隊商は、ほとんどアファル人に独占されていたと見られるからである。そのことはフランスのオボク総督ラガルドも認めているところである。したがって、この時期にフランスが運搬した塩は、アッサル湖の岩塩ではなくジブチの塩田のものであった。[7]

鉄道建設開始当初には、エチオピア南部の工事現場がダナクラ（アファル人）に襲われたという記録も残されているが、[8]現在までのところ、この鉄道とアファル人との関係についての言及は皆無に等しい。ただし、次の仮説は実体にちかいと考えている。すなわち、セネガルに鉄道が開通したときにモーリタニア起源とみられる河川を利用していたトラルザ人の運搬業が没落[9]したように、隊商による家畜の交易が鉄道によって被った痛手は計り知れなかったのではなかろうか。ここではこの説を実証するための最初の一歩として、次の事実のみを紹介しておきたい。すなわち、1901年９月時点において、フランス人は緊急の要請事項として20両の牛、馬、ロバ輸送用の貨車の建設を要求したという。ジブチに入植したフランス人のなかに牧畜業者もいたのであろうか。[10]

ガダブルシ人も含めイッサ人と鉄道との関係については、不十分ながら資料が残されている。詳細な検討は改めて行ないたいが、イッサ人の鉄道への対応は大きく三つに分けられる。一つは協力者、一つは反対者、残りは無関係な者である。協力者にもいろいろあり、鉄道建設作業に雇用された者、鉄道会社に雇用されたもの、土地提供者などである。最初の例としては1900年３月のＡ線と名付けられたジブチ=ディレダワ間[11]の工事現場における４日間の雇用状況を見ると平均2200人のうち450人がヨーロッパ人、1750人が現地人であり、現地人の過半数がソマリ系＝イッサ人であった。少数派としてはオロモ＝ガラ人がいた。また、イエーメン人が大工として雇用されていたが、彼らの日当はヨーロッパ人の８フランに対して2.5～３フランであった。[12]

鉄道警備関係に雇用されたイッサ人もいた。なお、20世紀初頭における現地人の雇用関係については、彼らに対して人類学的な関心も示していた鉄道技師オジルの記録及び Revue Génerale des Chemins de Fer などが有益なようであるが、未見である。

次に、鉄道建設に反対したイッサ人であるが、鉄道建設に雇用後に待遇面に不満で鉄道会社に反発した者もそれに含まれよう。[13] 彼らは、寝床と食料、飲料水があてがわれただけで、事実上は無給であった。不満を爆発させるイッサ人の出現は、フランス当局に中国人クーリー（苦力）を雇用させた。それは1896年に植民地支配を開始したジブチよりもはるか南にあるがインド洋でつながっていたマダガスカルでの中国人クーリーの勤勉度がすでに証明されていたためであろう。

イッサ人労働者の「暴動」が発生した時期は、サイイド・ムハマド・ハッサンに指導されたイ

スラーム改革運動かつソマリア統合的運動（微妙な違いであるが、ソマリア統一運動というのは政治的虚構につながる）、俗にはイギリス側のつけた名称「マッド・ムラー運動」[14]で知られるの第一回高揚期に相当していたために、この運動と「暴動」に関連性があったかも知れない。実際のところサイイド・ムハマド・ハッサンの部下になったイッサ人は少なくなかった。第一高揚期の例としては、1900年３月のエチオピア南部ジジカでの戦闘（略奪）行為があった。そこには、わずか４年前にアドワでイタリアに勝利した勇敢な戦士の姿はなかった。

鉄道工事に対する攻撃は運動の開始された1899年よりみられたが、1900年６月のものがそれまでで最も大きな犠牲者を出した。すなわちＡ線の起点ジブチ駅より123キロ地点－駅では11駅目のアイチャ〔仏領ソマリ海岸領内〕の手前において二人のアラブ人と８人のイタリア人[15]が殺害された。この事件とほぼ同時期に南アフリカで見られたゲリラ戦での鉄道破壊工作が敵の兵隊や食糧の運搬を絶つという自覚をもったものであったが、この事件やその後の鉄道線路や工事現場への攻撃がそうした自覚をもっての行動であったかは不明である。少なくとも組織的なものではなかったイッサの攻撃のなかには、線路の一部を持ち帰り、槍を作ったとの話も伝えられている。

第三の軍事的利用であるが、1917年のＡ線開通は第一次大戦中であったが、開通時にエチオピアの兵隊や武器・食糧がこの鉄道で運ばれたことはないようである。また、ソマリアさらにはトルコの支持を得ようとしたエチオピアの変わり種であるイスラーム教徒の皇族イアスは、エチオピアの権力抗争のなかでこの鉄道を軍事的に用いられなかった。それが軍事的に利用されたのは、1935～６年と1940～１年の第二次イタリア－エチオピア戦争中である。1936年５月にアジス・アベバからロンドンに亡命するハイレセラシエ皇帝一族とその護衛を乗せた列車には、ムッソリーニの黒シャツ隊も乗ったし、1941年にはエチオピア救援に向かうイギリス軍隊も利用したであろう。

1927年にエチオピアと友好・通商条約を締結した日本も、ジブチ=アジス・アベバ鉄道の恩恵を多く受けていたが、1935年の第二次イタリア・エチオピア戦争の開通までは、フランスが鉄道事業からの恩恵を最も受けていたことは確実であろう。日本でエチオピア・ブームが起きていた1934年にジブチ経由でアジス・アベバを訪れたある日本人は、ジブチ=アジス・アベバ鉄道に乗車した印象のなかで、「伊太利政府もフランス同様に鉄道利権を欲しがって自国領土のエクトリア［エリトリアの誤り］、イタリ領ソマリーランドを繋ぐエチオピア縦貫鉄道敷設の計画をしております」と述べている。[16]

鉄道とともに、港湾建設と建設後のドッグにおける仕事にジブチの圧倒的多数派住民だったイッサ人がどのような関わりをもったかは、ジブチの植民地時代（仏領ソマリ海岸～アファル・イッサ時代）の社会経済史や民族史の重要テーマなのだが、現状ではセネガルのダカール港の研究に見られるような成果がない。少なくとも、植民地サイドの資料は外交資料館（文書館）にあるはずである。ただ、1968年における親アファル政策の結果、ジブチ港で働いていた資格を有した1200人の港湾労働者の多数を占めていたソマリ系がアファル人に取って代わられている。[17]

第二次世界大戦後のアファル＝イッサ関係（1945～67）

第二次世界大戦が終了し、大ソマリアの一部宗主国イタリアが敗戦国になったためにイギリス主導によるソマリア統一の運動が開始された。具体的には英領ソマリアのソマリア民族連盟SNLや10年間の期限付きでイタリア信託統治領となった旧イタリア領ソマリアのソマリ青年同盟SYLが統一ソマリアと独立をめざして活動を展開した。その運動の波にジブチ＝旧仏領ソマリのイッサ人ものまれると予測されたが、ジブチに独自の政党が結党されることはなかった。また、1949年８月にジブチのソマリ人がイッサとガダブルシに分かれて衝突し、双方で100人の死者を出したという小規模ながらも内戦が影響していよう。[18]

他方で、イギリス政府はフランスのドゴール将軍（1945～６年首相）に新生ソマリアへの合併の工作を秘密裏に実施していたという。これに対して、アファル系住民が脅威を感じるのは当然のことであった。彼らは首都ジブチの人口の圧倒的多数を占め、都市化も進んでいたイッサが近隣の同族と提携し、独立後の指導権を掌握することを懸念していた。したがって、旧イタリア信託統治領ソマリアと旧イギリス領ソマリランドが各々独立した後に困難なしに、1960年にソマリア民主共和国として独立した後に合流する道は選ばなかった。

ここで参考までに1947年と67年の首都ジブチにおける三民族の人口を示しておきたい。アファルは、1947年の1500人が67年には3500人と倍以上に増加している。イッサは4500人が7800人に、イシャーク・ガダブルシは5500人から6200人と微増となっている。三民族内での、したがって総人口に占めるアファルの比率が、この20年間にほぼ倍増していることに注目していただきたい。しかもこれはソマリ系住民の多い首都の数字であるので、植民地全体の人口分布を見てみたい。1947年にアファルは総人口９万6100人中２万4500人で約24パーセントであったが、67年には、12万5050人中4万6557人で37パーセント強であった。それに対してイッサ（ここではガダブルシを区別していない）は、２万1000人から２万9819人という微増といってもよい増加であった。[19]にもかかわらず、ジブチ議会（L' Assemblé térritoriale）の議席数は、1947年に総数10人中アファル４名、ソマリ系３名であったのが、57年には総数30人中アファルは８名、ソマリ系が14名であった。クーバはこの変更をフランス当局が親ソマリ（イッサ）政策を採用した結果であると指摘しているが、これは決してアファル側の偏向とはいえないであろう。[20]

1960年にはアファル人の議員が13名に増えたが、ソマリ系が14名で多数であることには変わりなかった。しかしながら、フランス政府の政策には変化の兆しが見えだしていた。すなわち、イッサ人がパン・ソマリア運動の波にのまれることを警戒しはじめ、ジブチにも海への出口を求めていたエチオピアと協力する政策を模索していた。そのことは即座には親アファルにはつながらず、むしろアファル社会に対してはないがしろにする態度をみせた。また、アファル人とイッサ人の間にくさびを打つ、二民族の分断化政策の導入を模索しはじめた。[21]

C. F. S. から T. F. A. I. へ（1967～8）

1977年に旧仏領ソマリ海岸がジブチ共和国として独立するまでには、それなりの紆余曲折があった。以下ではアファルとイッサの関係についてエチオピア、ソマリアそれに旧宗主国フランスの思惑も多少は考慮に入れながら、事実関係を簡潔に整理するに留めたい。[22]

まずは1967年3月に実施された国民投票の本質は、仏領ソマリ海岸から独立するか、アファル－イッサ・フランス海外領（T. F. A. I.）に名称変更してフランスの管理下にとどまるかをめぐる選挙であった。結果はソマリアにおける大ソマリア主義＝パン・ソマリア主義の台頭に脅威を感じたアファルがフランスの「保護」を強く求めたこともあるが、フランス当局による一種の操作がみられたと考えられる。それは、石油利権に絡んだ1964年以降のナイジェリアのセンサスにおける操作とも類似点を持っている。

この時の国民投票のために選挙人登録をしたのは、選挙資格者全体の31パーセントのみで、その内訳は、アファル56パーセント、ソマリ系37.5パーセントであった。（残りはアラブ人とヨーロッパ人）。実数では登録者総数3万9024人でアファル2万2004人、ソマリ系1万4689人であった。この人口と選挙人に関する統計でもう一つ見落としてはならない点は国籍であろう。すなわち、アファル人口の99パーセント以上がフランス国籍であるのに対し、ソマリ系ではフランス国籍の者は過半数をわずかに上回っているに過ぎない。[23]

人口比を加味すれば、投票結果は明白であった。64年ころより政治的イニシアティブをソマリ系住民より奪取しはじめていたアファルは、この国民投票により、「怪我人にナイフを向けたのである」。[24]

66年8月にドゴール将軍がジブチを訪れた時の政治状況も、独立前のアファル－イッサ（ソマリ）関係とフランスの介在について知るためには重要な事柄であろうが、これも後日に回さざるをえない。けれども、この共和国大統領の訪問を機に二つの政党が共同戦線を組んだことは指摘しておく必要があろう。つまり、アファル人の最大政党「アファル民主連盟」Union Démocratiqne Afar（U. D. A）とこれに対抗させるために1964年の初めに結党された「人民運動党」le Parti du Mouvement Populaire（P. M. P.）とが提携することになった。

以上のことも含めた第二次世界大戦から独立までのフランスによる「現地人政策」を、クーバは、親イッサ期（1949～58）と親アファル期（1963～76）とに分け、このことがアファルとイッサとの間での権力抗争や社会混乱を招いたと結論つけているが、[25]筆者も現段階ではこの見解に賛成である。ただし、実情はより複雑であり、アファル内部、イッサ内部における抗争が絡んでいた。

大まかにいえば、アファル側ではアリ・アレフ（ブルハン）とアフメド・ディニの政党の対立が、イッサ側ではハッサン・グールド（英語式ならグレド）とイドリスの政党がライバル関係にあった。この対立には、独立いいかえればフランスに依存するかをめぐる立場と中央対地方、さらには地方の中でも3つの選挙区－アリ＝サビエ、ディキル、タジューラ、オボクによる地域主

義が絡んでこよう。歴史的にみてもジブチ領内に二つのアファルのスルタン国が存在した。すなわち、タジューラとエリトリア国境地帯に広がるラハイタがそれである。また、アファルよりもより近いアイデンティティをもつ民族的集団 ethnic entity としてアドイ・マラ＝アドヒャマラ（「白」）とアサイ・マラ＝アッサヒャマラ（「赤」）が存在したことはすでに述べた。[26]

67年の国民投票の結果がもたらした新たな政治状況としては、1959年（パン・ソマリ民族運動がソマリアのモガディシオに結成された年）に結党された「ソマリ海岸解放戦線」Front de Libération de la Côte Somalie（FLCS）が急進化し、69年には学生運動のリーダーであったアデン・ロブレーを指導者に選び、反フランス＝即時独立のスローガンを前面に押し出した。けれども、74年には穏健な独立要求政党であり、イッサの実力ある政治家ハッサン・グールド（英語式発音ではグレド）が率いる「独立をめざすアフリカ民衆連盟」Ligue Populaire Africaine pour l' Indépendence（L. P. A. I.）と合流した。[27]

68年の選挙では、アファルのアリ・アレフを党首とする進歩党[28]が圧勝した。1957年に創設された政治評議会の副議長という要職に60年より就任したアリ・アレフは、76年までの長期間この地位を維持し続けた。[29]アファルの利益よりもフランスの利害を大切にするといわれる程で、フランスの傀儡であったが、すでに述べたジブチの港湾労働者のアファル化政策を68年に提言していた。彼はソマリ系をアファルに代置することを〔une opération de sédentarisation〕と命名し、「この領土を所有する唯一の道具（手段）は、鉄道によって保障された港湾である。したがって、外国人で構成された港湾労働者は［フランス］国籍の者に置き換えられるべきである」と10月26日付け『ジブチの声』で語っている。[30]

アレフはタジューラ出身であり、首都ジブチでは無名であった。また、もともとジブチはイッサの居住地域であった。そこでイッサの有力政党で即時独立に反対し、フランスとも良好な関係を保ち、アファル同様に副議長に就任したがっていたグールドの「イッサ民主連合」U. D. I. と提携した。[31]要するに、少なくとも当時のジブチの政治状況は、アファル対イッサという民族的対立よりも、フランスに従属することで利益を得るか、政治的独立を優先させるかという尺度による政治地図がみられたと考える。

1990年代のジブチの最大野党として、またジブチの民主化の運動で重要な役割を果たした「統一と民主主義の再興をめざす戦線」Front pour la Réstauration de l'Unité et de la Démocratie（FRUD）の党首アフメド・ディニのこの時期の行動について簡単に述べておきたい。オボク出身のディニは1958年にわずか28歳でジブチの議員に選出され、最初はアレフと行動を共にし、59年にはグールドに代わって副議長の要職に就任するスピード出世ぶりであった。ところが、1960年代には波乱があり、ついに70年にはアレフのフランス偏重を批判したために内相を罷免された。その結果、新政党「未来と秩序のための連盟」L. A. O. を結党した。それは二年後にはグールドの U. D. I. と合流して「アフリカ民衆連合」U. P. A. を結成した。これが独立時の有力政党「独立をめざすアフリカ民衆連盟」（L. P. A. I.）の母体である。[32]

独立前夜（1975～77）

1968年にモーリシャスがイギリスから独立以降、ジブチの南に位置するインド洋西端の島々が75年コモール、76年のセイシェルと続々独立していった。70年代はポルトガル領を中心にアフリカで「第二のアフリカの年」ともいえる国際環境があり、国連やアフリカ統一機構が積極的に機能した時期であった。それに国内の経済状況が加味されてディスカール・デスタン大統領は、ジブチから手を引く決断をした。そのために独立後の政治のありかたを考え始めた。一つ目の選択はフランスに擦り寄り、アファル偏重政策を遂行したために不人気になっていたアリ・アレフを穏健な政治家にすげ替えることであった。交代の有力候補数名の中にはディニとグールドも含まれていた。(33)

76年７月にアリ・アレフが解任された後にはアブダラー・カミルを首班とする暫定政府が編成された。カミルは政治家というよりも官吏であり、権勢欲をもたない人物だったようである。一年後に実施される選挙を闘う政党は、L. P. A. L の他に「解放民衆運動」Mouvement Populaire de Libération（M. P. L.）、「独立をめざす国民連合」Union Nationale pour l' Indépendance（UNI）、それにソマリアに支援された「ソマリア・フランス海岸解放戦線」（F. L. C. S.）とエチオピアに支援された「ジブチ解放運動」（M. L. D.）という二つの戦線であった。(34)

註

（1）以下の記述は I. M. Lewis, *op. cit.*, pp. 1～3, p. 23, p. 43, pp. 136~8etc., Daoud A. Alwan & Yhanis Mibrathu, *op. cit.*, p. xix, p. 4, p. 6と *Arthur Rimbaud œvre-Vie*, pp. 609~640, p. 943などを参照。

（2）ラス Ras とはエチオピアでは将軍に相当する照合のことであるから、ラス・ジブチという人物がいたのであろうか。国名の由来に関わることであるが、説明している本をまだ見ていない。

（3）アドワの戦いについては、さしあたり岡倉登志『二つの黒人帝国』、174~189頁と『エチオピアの歴史』102~110頁参照。

（4）アドワの戦いの同時代の日本人としては幸徳秋水がその意義に言及しているが、エチオピアにおいて露仏同盟側、なかでもロシアが優位に立つと予測している。（『万朝報』、明治29年1月9日）

（5）以下の記述は主に、『二つの黒人帝国』、190~4頁、生田滋・岡倉登志編『前掲書』、135~146、161~7頁、Rosanna Van Gelder, *Le Chemin de fer de Djibouti à Addis-Abeba*, L' Harmattan, Paris, 1995参照。

（6）権上康男『フランス帝国主義とアジア ――インドシナ銀行史研究』東大出版会、1985、232頁。

（7）Rossanna Van Gelder, *op. cit*, , pp. 14~5.

（8）1899年より1903年まで刊行されたジブチへのフランス人入植者の雑誌 Le Djibouti の記事。筆者は1992年にエチオピアの国立文書館でこの記事に接したが、うかつにも正確に記録しなかった。その後、パリ国立図書館（B. N.）でもみつけたが、欠号が多く、掲載誌の確認はできなかった。なお、ゲルデルも、この資料をずいぶん活用している。ほぼ同時期の中国（清国）における義和団のように、西欧文化の象徴としての鉄道を破壊しようという自覚があったとは思えないが、遊牧活動や塩の採取という生活がらみであった可能性は否定できない。

（9）生田滋・岡倉登志『前傾書』、154~5、170~1頁参照。

(10) *Le Djibouti*, 7 septembre, 1901 ; Rossanna Van Gelder, *op. cit.*, p. 139.

(11) ジブチ=アジス・アベバの総距離784キロのうち、ジブチ=ディレ・ダワ間311キロをA線と呼ぶ。この線は鉄道が付設できなかったために馬車（後にはバス）で代替したディレ・ダワ=ハラル路線が付随している。このことは鉄道開通によりディレ・ダワが繁栄し始めたのに対し、ハラルが衰退したことと関係している。

(12) *Le Djibouti*, 7 Avril 1900 ; Rossanna Van Gelder. *op. cit.*, pp. 228~9, p. 231.
(13) とりあえずは、Rossanna Van Gelder, *op. cit*, . p. 231, pp. 258~9, p. 275.
(14) マッドは狂人、ムラーはイスラームの称号である。この運動に関する邦文のものは、『二つの黒人帝国』275~280頁、『アフリカの歴史』94~6頁。
(15) イタリア人は1860年代後半以降、アルジェリア、セネガルさらにはナミビアなどの鉄道建設現場で働いていた。
(16) 網中泰洋『富源エチオピア帝国全貌』大阪図書、昭和9年、27頁。1926年にイギリスはイタリアとの協定でこの計画を承認している。
(17) Rémi Leroux, *op, cit.*, p. 37.
(18) [Couba (1)], p. 31.
(19) [Couba (2)], pp. 98~9.
(20) [Couba (1)], p. 33~5.
(21) I. M. Lewis, *op. cit.*, p. 181.
(22) この時期についてはいくつかの研究書があるが、ここでは『ジブチの目覚め』という週刊誌を丹念に紹介している Rémi Leroux, *Le reveil de Djibouti 1968-1977*, L' Harmattan, Paris, 1998とアファル人の政党 MPL と FRUD で活動した哲学者 Ismail Houmed の著書 *Indépendance démocratisation enjeux strategiques à Djibouti*, L' Harmattan, Paris, 2002に依拠している。
(23) Rémi Leroux, *op, cit.*, p, 39, p. 276; [Couba (2)], pp. 108~9, pp. 112~5.
(24) I. M. Lewis, *op. cit.*, p. 203; 詳細は Dos., Developements in Somali Dispnte, *African Affairs*, 1967, pp. 104~12.
(25) [Couba (2)], p. 115.
(26) Dand A. Alwan & Yohanis Mibrarhu, *op. cit.*, pp. 7~8.
(27) *Ibid.*, p. 6, p. 52.
(28) 『アフリカを知る事典』、194頁。筆者の用いた資料には1968年当時の政党名として「進歩党」というのは見あたらないが、アレフの政党「アファル民主再編」R. D. A. が「フランス全体の中での統合と進歩」をスローガンとして74年の選挙戦を闘っている。(I. M. Lewis, *op. cit.*, p. 228.)。
(29) Daud A. Alwan & Yohanis Mibrarhu, *op. cit.*, p. 11.
(30) Rémi Leroux, *op. cit.*, p. 38.
(31) Iśmail Houmed, *op. cit.*, p. 7, p. 170.
(32) *Ibid.*, pp. 84~7, p. 170 ; Daud A. Alwan & Yohanis Mibrarhu, *op. cit.*, p. 9, p. 71.
(33) [Couba (2)], pp. 125~7, pp. 143~6.
(34) Iśmail Houmed, *op. cit.*, pp. 22~4.

結びに代えて——独立後の政治状況（1977～2000）

「選挙後の6月にはL. P. A. I. を中心とする五政党が大同団結して連合政府、「独立人民集合」(R. P. I.) が成立した」と『アフリカを知る事典』には書かれているが、これは表向きというか、一時的な一致にすぎなかったのではなかろうか。一例をあげれば、4月にガーナのアクラでジブチの諸政党が集まって挙党一致で新生独立国家を切り盛りしていく路線が選択されたものの、実際にはソマリア枢軸といえるF. L. C. S. =L. P. A. C. 陣営とUNとM. L. Dを中心とする陣営に分かれていた。[1]すなわち、R. P. I. は、いつ崩れてもおかしくない“砂の城”であった。

以下に記すのは、1977年にジブチ共和国として独立してから2000年までの四半世紀の政治状況をA. 複数政党か一党制か、B. 民族紛争の二点に絞って概観するものである。いいかえれば、本稿の続編の予告編ないしは続編のためのメモに過ぎない。

1977年から92年までは、実質上の一党制時代[2]であり、92年になって、同じアフリカ東部に位

置したモザンビーク、エチオピア、ザンビアなどと同様に、あるいは西アフリカにおいてもみられた複数政党への流れが、ジブチにおいてもみられはじめた。もちろんそれ以前の時期についても、77年～81年までは表面上は複数政党による挙党一致であった。それが79年３月には、連合政権で実権を掌握していたL. P. A. I. が名称を変更した「進歩人民集会」Parti populaire pour le progrès（R. P. P.）となり、独裁体制がスタートした。それに対して、三ヵ月後にはM. P. L. とU. N. I. の党員がエチオピアに亡命して「ジブチ解放民主戦線」Front démocratique de libération de Djibouti（F. D. L. D.）を組織した。

81年６月の大統領選挙でR. P. P. 党首のグールドが84パーセントの支持を得たことに対抗するために、野党は８月にディニを中心に唯一の野党「ジブチ大衆党」を結党したが、翌月には同党指導者全員が逮捕された。これ以降の約十年間は、グールドを中心とするイッサの独裁時代が継続したといえるであろう。その間にグールドと対立して内閣を追われたアデン・ロブレーが新政党を結党したり、亡命先のエチオピアからジブチに戻って非合法的に反政府行動を行なう者もいたが、無力であった。R. P. P. による弾圧の対象はアファルだけでなく、ソマリ系にも及んだ。たとえば、90年10月には200人のガダブルシ（役人と商人）が攻撃された。他方で、こうした独裁体制を打倒するために野党の結束も急速に進んだようである。

まずブリュッセルにおいて「民主運動連合」l' Union des mouvements démocratiques（U. M. D.）がアファルのF. D. L. D. とソマリ系M. N. D. I. D. を合併させて設立された。しかしながら、今後の検証課題であるが、野党連合の中核になったのは、1991年８月12日に三つの武装組織――A. R. O. D.，F. R. D. E.，F. R. P. D. を結集させて成立した「民主主義と統一の復興をめざす戦線」Front pour la réstauration de l' Unité de la démocratie（F. R. U. D.）[3]であろう。ジブチの紛争解決のために仲介の労をとったフランス政府も、政府との交渉相手の中心にFRUDを選択している。

FRUDを中心とした野党連合が結成されるプロセスと91年以降のグールド独裁政権との闘争を丹念に追うことは、ジブチ民主化のプロセスには、単純なアファル対イッサという民族対立としては割り切れない要素を含んでいたこと、旧宗主国フランスからのジブチの自立度についても浮き彫りにするであろう。もちろん、政治状況は経済状態に左右されるのであり、91年から96年にかけてのジブチ経済の劇的な悪化についても分析されなければいけない。97年にグールドは大統領に五選されたものの、彼の側近ともいえるイスマイル・オマル・ゲーレがアファルと連携して権力の座に就こうとの動きを見せ始めた。ついに98年３月にはアファル－イッサ同盟の実験的試みがゲーレとFRUDとの間で試みられた。その背景には国境地点でのFRUDのゲリラ闘争があった。かくて99年４月にグールドは引退を余儀なくされ、後継者には投票総数17万票の70パーセント以上を獲得したゲーレが選出された。[4]

2000年１月には、「紅海・インド洋地域の平和と安定」をスローガンに掲げたゲーレ政権とFRUDとの事実上の連立政府が成立したようである。ようであるというのは、その実情をまだ把

握していないからである。この時点以降のジブチの政治状況は、77年の独立に先立つ時期と同様に、地域全体の状況いいかえれば、小国ジチブを取り巻く「紅海・インド地域」全体で考えなければならないのである。それは「新規のソマリ平和計画」と関わり、湾岸戦争後にソマリアで不人気となったアメリカがエチオピアやケニアなどを後押ししながら、軍事的・経済的（輸送ルート）に重要な「アフリカの角」の沿岸部に注目していることとリンクしていそうである。それに対するフランスの動向や隣国エリトリアの態度も含む国際政治的な視点と、2004年４月時点でも、失業問題が深刻であり、政情が不安定であるというジブチ内部問題を結び合わせながら、次回はジブチ政治の現状のより直接的な歴史的背景を探ってみたい。

字数制限と時間的制約のために最後が尻切れトンボに終わってしまったことを御海容願いたい。

（1）Išmail Ibrahim, *op. cit.*, p. 23.
（2）以下の記述は主に〔Coubba（2）〕, pp. 326~31の年表を参考にした。
（3）一般には組織の略号はF. R. U. D. のように表記するが、つなげて「フリュド」と発音されたために、FRUD と表記される場合も多い。
（4）I. M. Lewis, *op, cit.*, pp. 290~1.

この研究は2004年度の文部科学省の研究補助金を受けている研究の中間報告である。

(2004年９月脱稿)